

平成 8 年度年次晩餐会

橋本総理、新入会の夫人とともに



1997 年(平成 9 年)

1 月号 (No.620)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

平成 8 年度年次晩餐会	1
マナスル登頂 40 周年記念行事	3
海外の山・5300m のロッジ計画	4
新名誉会員をご紹介します	5
追悼・小西政継さんを想う	6
報告	
自然保護委・白神山地問題	7
百年史委・講演会 明治時代の測量技師たちの活躍	7
図書委・第 4 回山を語る 雲の上の診療所	8
自然保護委・函南原生林観察会	9
集会委・きのこ山行 摩耶山	10
自然保護委・早池峰の自然保護を考える	10
三水会・現地集会 竜爪山	10
94 同期会・第 3 回懇親山行 鹿島槍ヶ岳	11
支部だより	12
越後支部 山形支部 宮城支部	
宮崎支部 岐阜支部	
図書室受入報告	15
新入会員・住所変更	16
INFORMATION	17
会務報告	18
ルーム日誌・会員異動	19

▶ 日本山岳会事務取扱時間

月・火・木・土曜日 10～20時
水・金曜日 13～20時

▶ 図書室開室時間

日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13～20時

■ 大盛會、出席者は七百十名

平成八年度の年次晩餐会が旧ろう七日、東京・品川の新高輪プリンスホテル国際館パミール三階の「北辰」で開かれた。

マナスル登頂四十周年記念と銘打って開かれたこの晩餐会には、内閣総理大臣として公務多忙な橋本龍太郎会長が、新入会員の久美子夫人を伴って参加したほか、海外からは中村テル、蔡禮樂両名誉会員、陳守珪、莊再傳、G・S・パウデル会員、国内では吉沢一郎名誉会員を筆頭に総勢七百十名の会員が出席した。

冒頭、病氣療養中の村木潤次郎会長に代わって挨拶に立った宮下秀樹副会長は、会の現況報告のあと、大要次のように述べた。

「マナスル登山の意義についてはさまざま語られているが、私も先ほど映画『マナスルに立つ』を見て、新

たな感慨を覚えた。一昨日、村木会長をお見舞いした際に、「マナスルは大衆登山の幕開けといわれることが多いが、自分はマナスル登山は大学山岳部の今までやってきたヒマラヤ人生、終生だと考えている」という話をされた。本日その話を会員の皆さんにしたかったと、とても残念がっておられた。私も映画を見て、皆さんそれぞれに、自分にとってのマナスルは……、というものがあるのだと思った。

秩父宮家から、亡き妃殿下のご遺志により、金一千万円がご下賜されている。現在別立てで積み立ててあるが、将来、何か記念の冠をいただいた基金に繰り入れて、ご遺志を尊重したいと検討中だ。

一方、明るい話ばかりでなく、悲しい話もある。ウルタルⅡ峰登頂後 ABC で山崎彰人会員が亡くなられ



「自然を愛し、山に親しむ」‘酒にも’ご満悦の橋本総理夫妻、右は宮下副会長



祝辞を述べるマテマ・ネパール王国駐日大使

た。四十周年のお祝いをやってきま
すよ、と元気にマナスルに出かけた
小西政継会員は、登頂後下山中に消
息を絶った。山登りは玄関の敷居を
跨ぐまで、と言ひ古された言葉が想
い出される。

厳しいシーズンが到来したが、皆
さんどうかご自愛のうえ、それぞれ
の山登りを楽しんでいただきたい」

続いて五十二名の物故者に黙禱。

今年の新名誉会員は笠原藤七(欠)、
代理・子息笠原健二郎(欠)、富田
健一(欠)、青木昇、木下是雄、松
丸秀夫、川喜田二郎、黒田初子の各
会員と、去る五月十八日の平成八年
度通常総会で報告発表されたクリ
シュナ・B・バルマ会員(欠)であ
り、宮下副会長から名誉会員章が手
渡された。代表挨拶は川喜田新名誉
会員。

新永年会員は横山雪男、赤澤清明
(欠)、湯浅充泰(欠)、望月力、金
子泰助(欠)、中埜愛三(欠)、村山
雅美、富田記一(欠)、中尾正武、
村上巖の各会員で、同じく宮下副会
長から永年会員章が手渡された。代
表挨拶は横山新永年会員。

■マナスル登頂四十周年を記念して
ネパール大使が祝辞

マナスル登頂四十周年とあって、
ゲダル・バクタ・マテマ・ネパール王

国駐日大使や、遠征時の後援社とし
て毎日新聞社から斎藤明専務取締役、
当時外務省カルカッタ総領事・粕谷
孝夫夫人、横有恒隊長子息、谷口現
吉・小原勝郎・今西壽雄・千谷壮之
助各隊員夫人、辰沼廣吉隊員子息が
マナスル関係者として招待され、紹
介された。祝辞はマテマ大使と斎藤
専務。

指名を受けた橋本総理からは、会
員としてユニークなスピーチが。

やがて待ちに待った会食、テーブ
ル歓談の時を迎えたが、名山名を付
した六十五のテーブルには、今回初
めての試みとして、出席百八十五名
の支部会員が、任意組み合わせで三
〜四名ずつ着席、支部交流の活発化
が試みられた。

また故今西壽雄名誉会員夫人から
は吟醸酒(七二〇ミリリットル)の
差し入れ。そのラベルには「自然を
愛し山に親しむ 今西壽雄」と墨書
してあった。

青木昇新名誉会員が「日本山岳会
のますますの発展と、ご列席メンバ
ーのご多幸を祈って」と乾杯の音頭
をとり、会食に入った。

メニューを紹介すると、「和風盛
り合せ シュリンプと帆立貝のミモ
ザ風 イタリアンサラダ サーモン
のベーコン、トマト、ピーマン添え
牛ファイレ肉のポアレソースシャスー



グッズコーナーも盛況



好評だった「お煎茶コーナー」



委員会・同好会活動をパネルで展示



壇上にあふれる新入会員、総理夫人も



「会員の皆様のご支援に感謝する」とK2登山隊

ル 握り寿司卓盛り 木の子蕎麦
カラメル風味のムース コーヒー」
の豪華版。

この会食をはさんで、K2登山隊
一九九六の隊員紹介、新入会員紹介
と代表者挨拶、出席支部と支部会員
の紹介が行われた。

出席会員の会場内歓談は尽きるこ
とがなかったが、やがて定刻を迎え、
参加者は名残を惜しみつつ会場を後
にした。ネームカードと交換した紙
袋には「山岳九一年」とともに、先
の吟醸酒一本が静かに横たわってい
た。

なお、晩餐会に先立って、隣接の
「慶雲」の間で、各委員会、同好会
の活動をパネル化した展示会、フォ
ト展、スケッチ展やK2一九九六登
山報告会も開催された。

また、簡易バーも開設、昨年好評
の「お抹茶コーナー」は「お煎茶と
空也の最中コーナー」に新装開店。

JACグッズコーナーでは、晩餐
会を記念して製作した「長袖ボロシ
ャツ」やマナスル初登頂四十周年を
記念した「Tシャツ」が好調に売上
を延ばした。

最後に、設営から運営に苦勞され
た年次晩餐会実行委員会の皆さんに、
紙上を借りてお礼申し上げます。

(文・会報編集委員 高田眞哉

写真・同 伊藤 敏)

マナスル初登頂四十周年 記念行事 映画と講演

敗戦に打ちひしがれた日本人に深
い感動と大きな誇りを与えたマナス
ル初登頂、今年で四十周年を迎えた。
日本山岳会では、毎日新聞社の後
援のもと、年次晩餐会に先立ち午後
一時から高輪プリンスホテル「プリ
ンスルーム」で一般、会員約五百名
を集め、映画と講演の会を開催した。
会場には当時の隊員やご家族の姿
も見受けられ、また入り口付近では、
マナスル登山関係の記念すべき数々
の品、写真、パネルも展示され、当時
を偲ぶ会員たちであふれた。

記念行事はまず、吉永財務担当理
事の司会により定刻通り、記録映画
「マナスルに立つ」が上映された。

マナスルは標高八二五メートル、
世界第八位の処女峰。植有恒氏を隊
長とする十二名の第三次日本登山隊
によって、昭和三十一年五月九日午
後零時三十分、絶頂がきわめられた。

映画は途中フィルム交換の時間を
入れて約一時間四十五分。監督山本
嘉次郎、ナレーターは森繁久彌によ
る当時の一大ヒット作品。雄大なヒ
マラヤの大自然の中に繰り広げられ
る人間のドラマがそこにあった。今
は亡き植隊長をはじめ各隊員たち若



当時の写真や装備を展示



マナスル初登頂40周年の記念講演をする日下実会員

き日の勇姿が現れ、改めて往時の快挙が偲ばれ、四十年の歴史の重さを感じさせた。

約十分間の休憩をはさんで、午後三時より登頂隊員日下実氏による講演が行われた。

日下氏は五月十一日、加藤喜一郎隊員とともにマナスル山頂に立った第二次登頂者であり、現在は栃木県教育委員会委員長の要職にある。講演は約三十分、要旨は次の通り。

「私は驚いたことに登頂隊員に選ばれ、幸運にも山頂に立ったが、それは私一人の力ではなく、皆の力によるものであった。頂上滞在時間は約一時間か一時間半だと思う。むしろ下山には大変気を配り、最終テントをきれいにして帰った。マナスル登山の成功は槇隊長の人柄によるところが大きく、教科書通りの登山ができ、比較のエピソードは少ない。それでも私は松田隊員とともに当時二十五歳の最年少隊員で食料を担当、槇隊長のカレーライスの話、ボカラでの黒豚のトンカツは有名である」

講演時間は瞬く間に過ぎたが、当時を知る中高年には貴重な感激の再現、当時を知らない若者にもマナスル登頂の意義の重さに、深い感銘を与えた。(公報編集委員・小倉 厚)

*記念展覧会の出品目録は次号に掲載します。

海外の山

5300mの ロッジ計画

江本嘉伸

二十一世紀まであと四年。未来の話をしよう。

十二月、国際公募隊を組織しているニュージーランドのラッセル・ブライスが講演のため初来日した折、何度か話をする機会があった。

ブライスは、七十年代からヒマラヤに通いつづけ、ネパール、チベット事情に精通している。フランスのシャモニーに住んで六年になるが、大変な仕事人間だ。春はチョモランマの公募隊を組織し、夏は登山のガイドとしてシャモニーで仕事。秋は再びチベットに戻ってチョー・オユール公募登山の指揮をとり、冬は無論シャモニーでスキーのガイド、だ。

ブライスの話を聞いていると、顧客との連絡など出発前の準備から現地に必要な物資の手配、輸送、ベースキャンプの設営、ルート工作の手順など実に緻密なノウハウができていのに感心する。ヒマラヤ登山のプロとは、クライミングの力量、指導力だけでなく、人としての誠実さ、そして相当の事務能力も兼ね備えて

いないとなれないものだ。

ブライスの場合、とりわけシェルパとの関係を大事にしているのがわかった。優れた装備を支給し、コミユニケーションをよくし、信頼できるチームを作り上げることに力を惜しまない。高峰登山のガイド役であるシェルパについてのこれまでの各国登山隊たちの認識は間違っている、というのが彼の持論のようで、将来はよく訓練されたシェルパにクライアントをまかせることがあっていい、という。

登山やスキーのガイドだけではなく、チョモランマのベースキャンプ地にロッジを作ろう、という大きな計画をブライスは進めている。すでにチベット自治区政府やベース近くのロンブク僧院など七十七の組織の同意をとりつけた、と四十四歳のこの登山家は、書類の束を見せた。

五千三百メートルの高所にも関わらず、チョモランマのベースキャンプにはトラックかマイクロバス、ジープで乗りつけることができる。高度障害のことは考えなければならぬが、ヒマラヤの高峰の中でもこのような条件に恵まれた山は少ない。しかし、そこには登山隊のテント

以外に泊まる場所はなく、訪れる人たちは、小さなホテルのあるティン

リやシュガルルまで何時間もかけて下りなければならぬ。中国側連絡官のための建物はできているが、偉大な風景をこわすかもしれないホテルやロッジの類いに、本気で取り組む者はいなかった。

ラッセル・ブライスは「地元のチベット人のためにもなる施設」として、それを実現しよう、と考えた。

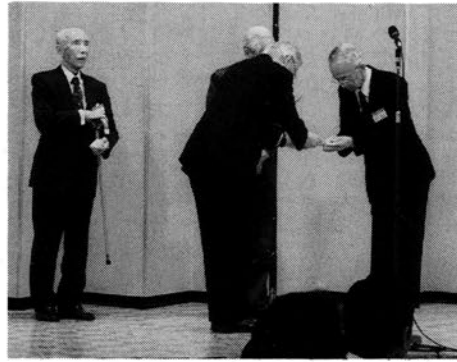
チョモランマ北壁の雄大な眺めを楽しめる四十数床の快適なロッジというだけではない。建物そのものを景観に溶け込むようチベット様式の控え目なものとし、診療所、自動車整備など地元民にも役立つ機能をもつ新機軸の施設にする予定だ。

とりわけ、汚水処理、排水など衛生方面には特別な配慮を施す。ベースキャンプの登山隊のゴミも回収して処理することも計画のうちで、ロッジが出来上がることで、チョモランマ山麓の自然環境が少しでもよくなるのが夢だという。

収益の一部は、チベット人たちに還元するそうだ。自然の中への人工建築物への批判が叫ばれている折、異論もあるが、こういう場合、問題はどんな人間が、何をめざしてやるか、だ。

順調にゆけば、一九九八年着工、二〇〇〇年には開業したい、という。

新名誉会員を ご紹介します



宮下副会長から名誉会員章を手渡され……

歩き、七十一歳よりスイスの山歩きも。感想「戦争末期、大量の山岳書を有していた虎の門のルームが焼け、終戦直後、目黒の掘り建て小屋で塚本繁松さんと離散していた役員の連絡に苦労したことなどが思い出されます。昨今の発展ぶり、例年の盛大な年次晩餐会を見るにつけ、全く夢のようです」

青木 昇(会員番号一七二二)

明治三十八年十一月二十九日生まれ、九十一歳。二十歳頃奥秩父、八ヶ岳に遊び、山の美しさ、神秘に心惹かれ、爾来本邦全域の主な山々を四季を通じて踏破する。海外の山はスイスを中心に、アラスカ・マッキンリー、カナディアンロッキー山域など、メキシコ・ポポカトペテル、カラコルム、ネパールヒマラヤのトレッキングも。感想「年には勝てず、山に行けなくなり寂しい思いをしている時、このような処遇をしていただき、嬉しさでいっぱいです」

木下是雄(会員番号二五六三)

大正六年十一月十六日生まれ、七十九歳。一高(旧制)旅行部時代から山登りを始め、東大スキー山岳部に遭難救援が縁で入部。一九五六、七年米国南極隊に参加。六一年以降スイス、オーストリアで登山、八六年以降はネパール、ブータン、パキスタン、パタゴニアなどでトレッキング。

ング。専門の物理や言語関係の著作は別にして山の本に『ペルケオスキー読本』『山、ひと、スキー』など。感想「光栄です。五十年近く在籍して、多くの方々に親しくしていただいた軌跡をふりかえると心温まる思いです」

松丸秀夫(会員番号三五〇三)

大正四年五月十四日生まれ、八十一歳。昭和十年代の谷川岳東面に思い出が残る。東大スキー山岳部出身。プラスチックスキーがまだなかった昭和三十五年からグラスファイバー強化の全プラスチックスキーを毎年自作。『スキーはトルエンから合成する』と題して日本薬学会のニューエディションに載せた。感想「七年間『山日記』担当理事を務め、戦後の『山日記』の盛衰に直接関わったが、休刊になり、起死回生もならなかったことについて非力を恥じています。それなのに名誉会員にご推挙いただき恐縮しております」

川喜田二郎(会員番号四〇四二)

大正九年五月十一日生まれ、七十六歳。戦前はトムラウシ岳登頂、満州から白頭山、冬期南アルプス、北部興安嶺縦断、戦後はヒマラヤ登山に力を注ぎ、ムクトヒマール登頂、アンナプルナ南峰西南の小峰Khaer登頂など。旧制三高、京大で山岳部関係に在籍。今西錦司氏の弟子

のようになり、登山、探検、学術、思想面で学ぶ。著作は多数、ヒマラヤの学術研究で秩父宮記念学術賞、ヒマラヤ山村への技術協力でマガサイサイ賞受賞。感想「若輩にもかかわらず名誉会員にいただいたことは大変名誉なことです。縁のあったヒマラヤの自然・文化の環境保全には今後とも努力したいと思います」

黒田初子(会員番号四四四二)

明治三十六年一月二十三日生まれ、九十三歳。大正末期、登山、スキーを始め、夫君黒田正夫氏とともに、秩父、八ヶ岳、富士山、北アルプス、南アルプスなど多くの山に登る。著作は『山の素描』『味と自然の散歩道』『いきいき九十歳の生活術』など。感想「女性がまだスキーで登山することなどなかった時代に、思いきって行ってよかったと思います」

永年会員は十名

横山雪男(会員番号・二三五四)

赤澤清明(二三五九)

湯浅充泰(二三八二)

望月 力(二四〇三)

金子泰助(二四一六)

中埜愛三(二四七八)

村山雅美(二四九七) 名誉会員

富田記一(二五〇四)

中尾正武(二五二五) 終身会員

村上 巖(二五二八)

追悼

小西政継さんを想う



田邊 壽

小西さんが、マナスル七八〇〇メートル付近で行方不明となったという知らせを聞いたのは十一月七日だったろうか、家内がニュースで聞いたということだった。まさかという反面、とうとうという気持ちが胸の片隅をよぎった。

小西さんと知り合ってからもう何回も彼のヒマラヤ行を見送ったが、今度のマナスルは何故か妙に気持ちにひっかかるものがあった。そんなことで私にしては珍しく、何度か小西さんに電話をした。八月十六日だったか、小西さんから手紙がきた。「①別紙計画表の内容でマナスルに行ってきます。来年は、五月・九月でGⅡ(ガッシャブルムⅡ)。雪崩には十分気をつけます。やられたらやられたで、これは仕方がないといつも思います。」

②帰国後、ナベさんが登れる(行ける)山に一度行きましょう。友人で

も誘って一泊でどうですか? ハケ岳の側にあるメシモリ山でけっこうハイキングでGOODです」

そして、小西さんは帰って来ない人となった。

小西さんと初めて会ったのは、日本山岳会エベレスト南西壁のプロジェクトの時だった。小西さんの名前は国内の数々の登攀記録はもとより日本最先端のアルピニスト集団だった山学同志会の会長として、一九六七年二月冬期マッターホルン北壁、一九七二年一月冬期グランジョラス北壁の登攀を成し、エベレスト南西壁の時には、アルプス三大北壁の冬期のプロジェクトとしてアイガー北壁の冬期登攀に挑むところであり、日本最強のアルピニストとして知れ渡っていた。

初めて小西さんと顔を合わせたのは日本山岳会のルームだった。山岳会がアルプスの冬の壁の時代から、ヒマラヤの壁の時代への流れの中で目標としたエベレスト南西壁の隊に小西さんを招き、私もその隊に参加した。

小西さんには失礼な言い方だが、鬼瓦のようないかつい風貌であり、口数の少ないほうで幾分とつきにくかった。しかし、厳しさと高さを激しく求めながら、心の底に、人に対する優しさを秘めた彼に私はたち

まちとりこになった。

小西さんのことを私は、会長、会長と呼んだ。彼が山学同志会の会長だったからだ。彼は私のことを「ナベさん」と呼んで、会長・ナベさんのコンビは、エベレスト街道のベリジェ通りのエベレストに向かって開けた谷を「君の行く道は、果てしなく遠い……」なのに何故、何を求めて君は行くのか、そんなにまで……」を歌いながら歩く仲間となった。

知り合ってから小西さんに関しては、驚きと感嘆の連続だった。アルピニストとして小西さんは、高さと厳しさに卓越した技術と心をもって挑んだ人生だった。

思い返して、何をとても返すがえすも良い仲間を無くしたと悲しい。

小西さんは、山登りは勿論だったが、仕事も一生懸命やったし、良い仕事のできた人だった。小西さんとは仕事の話も良くした。小西さんは「クリエーター九〇〇〇」の仕事で笑いながら何度か言っていた。「ナベさん、ウンと稼いで一年の三分の一くらい働けば良いようにしてヒマラヤに行こうよ……」と。

しかし、私は小西さんがヒマラヤに行くためにだけ仕事をしていたとは思えない。小西さんの話には仕事屋としての秀でた一面を十分すぎるほど感じた。

きちんとした活字のような文字、文章、そしてスケッチと、山登りの豊かな楽しみを胸一杯吸っていた小西さん。

会長の追悼文を書くのは嫌だ。

小西さんが消息を絶って一か月余、私はかたくなに彼のアクシデントを思わなかった。長い山の経緯で八〇〇〇メートルでのごんごんことかよく判っているのに、どうしても小西さんが山から帰って来ないなんて思うことが出来なかった。

——そして、とうとう奥さんの郁子さんから手紙をいただいた。

『……………』

十月一日午前二時から三時の間を最後に、マナスル七八〇〇メートル付近で、小西政継が行方不明になりましたから、早いもので五十日が過ぎてしまいました。明日十一月十九日は彼が五十八歳になるはずの日でした。……………

後になりましたが、多くの方から御心配いただきました葬儀や別れの会は、彼の予てからの思いを一番に考えて何もいたしません。何かしないとやりきれないという御気持も伺いましたが、いつまでも心の片隅に生かし続けていただけましたら、なによりもううれしいです。……………」

何時までも登り続ける小西政継さんに心より敬意を表します。

報告

REPORT
1月

自然保護委員会

白神山地問題で
意見書提出

一九九三年十二月に世界遺産として登録された白神山地の管理体制については青森県、秋田県、青森・秋田両営林局、及び環境庁の五者からなる「白神山地世界遺産地域連絡会議」を中心にして、その管理計画案がまず示され、それに対して山岳団体もその意見を求められたのが平成六年の十月のことであった。十分な時間もないこともあり、とりあえず青森支部からの意見として「管理計画案」の中にもられていた「核心地域への入山規制」条項に対しては強く反対する立場を表明した。そして、これらの意見を入れてその後発表された「管理計画」では核心地域における登山などについては別途

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

取り決めるとして含みを残した。

この入山規制問題については、当会会員の間でも様々な意見があり、例えば本会会報六一〇号(石田稔郎会員)、六二二号(中村純二副会長)などの意見が寄せられている。

当委員会としては、昨年の自然保護全国集会での議題の一つとしてこの問題を取り上げ、参集した支部の自然保護委員を交えて熱心に論議した結果、少なくとも絶対反対の立場は「世界遺産の保存」の見地から再考するべきであるとの結論となり、その後、委員会として討議を重ねた。その結果、委員会の案として別記の「当委員会としての考え方」をまとめ、今年の全国集会で全国の自然保護委員に提示し、賛成を得たものである。平成八年十一月十二日に前記の連絡会議主催の白神山地世界遺産地域懇談会が開かれるのに際して、この「考え方」を討議の資料として

いただくよう、次の三点を付記して連絡会議事務局に提出した。

- 一、世界遺産登録の意義についての啓蒙を十分にすること。
- 二、地元山岳団体との話し合いを十分にすること。
- 三、現地の標識が、営林局や環境庁など様々であるので、連絡会議名に統一をはかること。

*

この意見書の提出に先立って、十月二十七日に青森市で開かれた「白神山地問題を考える登山者の集い」でも、この意見を「生態系の保護のためには入山規制がどうしても必要である」とことの説明とともに、当委員会の意見として表明した。他の地元山岳団体(当会青森支部を含む)の意見は「一方的な入山規制には絶対反対」であって、当委員会とは見解が異なっていたが、この点についての質問も議論も出なかったのは不可解であった。

「白神山地世界遺産管理計画に関する日本山岳会自然保護委員会の考え方」(抜粋)

一、核心地域への立ち入りについて。
①核心地域への立ち入り規制は基本的には必要である。従来からの慣習によるイワナ釣りや山菜採りは認めてもよいが、営業目的のものは禁止

する。

②登山は許可制にする。

③「既存の歩道」については標識で明示すること。

二、緩衝地域における野外レクリエーションについて。

管理計画に示されている「森林の文化・教育的な利用」は望ましい。しかし、入山者の増加による観光地化が心配されるので、利用施設の設定は最小限に止めるべきである。

三、遺産地域周辺部の取扱について。

世界遺産としてふさわしい生態系の維持のためには、将来は遺産地域を周辺まで拡大することが望ましい。当面の方策としては、一般車両の林道通行を禁止し、車道の新設などは見合わせる。

四、ヘリコプターによる遊覧飛行の禁止。

五、管理体制の一本化について。

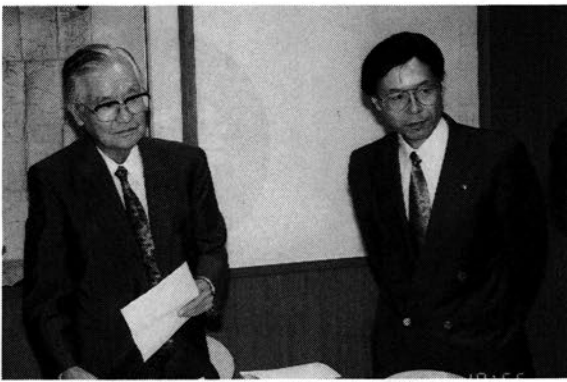
環境庁、林野庁、文化庁、青森県、秋田県にまたがる現在の管理体制を一元化することを望む。

(委員長・澤井政信)

百年史委員会

講演会・明治時代の
測量技師たちの活躍

明治二十六年八月一日、陸地測量



館澤彦氏の孫・館豊夫氏(左)と曾孫・館和男氏(右)



講演する師橋辰夫氏

技師の館澤彦氏は、山案内人嘉門次の案内で、三角点の位置を選定する撰点作業のため、穂高岳(現在の前穂高岳)の頂上に立った。しかし、下山の途中、頂上付近の難場で足を滑らせ、一八〇メートルほど転落し、奇跡的に助かった。ウエストンの登

頂に先立つこと二十四日前だった。

これは、近代登山初期の有名な事実であるが、このエピソードを登山史上どう位置づければよいか。

百年史委員会では、JAC百周年にあわせて、JACあるいは登山の百年史を刊行すべく、現在のところ、基本的な年表作りとともに、登山史上の主要な出来事にスポットを当て、今までとは異なった角度から検討を加えたり、新たな資料の発掘に努めている。

その一環として九月二十七日、日本古地図学会会長の師橋辰夫氏にお願いして、「近代登山初期における測量技師たちの活動と功績」館澤彦氏の活動を中心として」という演題で、ルームにおいて講演会を開催した。参加者は四十名、大変な盛会であった。

当日は、館澤彦氏の令孫館豊夫氏、令曾孫和男氏も出席され、館澤彦氏の残した自筆の手記、スケッチを多数(表装済み十三巻)持参下さり、参加者一同、眼福の栄に浴した。百年史委員会では、別の機会に、会員の方々にもご覧いただく場を設けたいと考えている。

そもそものは、昨年九月、館豊夫氏(三菱自動車工業相談役・元社長)が、日本経済新聞の「私の履歴書」の中で、祖父館澤彦氏のことを述べて

おられるのを織内名誉会員が見つけた南井英弘理事が館氏に連絡を取ったのが発端だったが、その後の館家との接触の中から今回の講演会が実現した。

講師の師橋辰夫氏は、わが国の古地図研究の第一人者で、かつて、館澤彦氏の「三拾三年乃夢・日本測量野史稿」を紹介し(「地図」VOL.9・NO.1九七二)、館澤彦氏の活躍ぶりについては最も詳しい人の一人である。

講演の中でも、「点の記」という国土地理院に残されている明治二十一年以降の一三三等三角点の設置記録のことが紹介されたが、当時の測量技師たちの苦勞ぶりについてはほとんどわからず、それらの記録は、もし残っているとすれば、個人で持ち帰って保管されているはずであるとの指摘があった。

また、一枚の地形図を作るためには、膨大な人員と何年もの歳月を必要としたが、登山との関連という点では、三角点の位置を決める撰点作業のために山野を跋涉した測量技師たちの活動は登山そのものであり、近代登山の先駆者として評価すべきだし、撰点のための登頂は登山史の中でも明確に登頂として位置づけるべきである等、有益な示唆が多く、参加者に感銘を与えた。(中島 寛)

図書委員会

第四回山を語る 雲の上の診療所

九月十三日、ルームにおいて講師の大森薫雄会員は、槍ヶ岳山岳診療所を四十余年間支えてきた滋恵医大山岳部の創設期の話から登山者気質の変遷、医者のあるべき姿にまで及び、一時間にわたりユーモアを交えて興味深く語った。

診療所日誌によれば、昭和二十五年に槍ヶ岳山岳診療所として開設し



槍ヶ岳山岳診療所の40年を語る大森薫雄会員(中央)

た初期の頃は、登山者の体力も装備も粗末で、夏山における低体温症(凍死)が年間二、三人はいたという。また、意外なことに治療の内容は内科疾患が七割と多く、この中で高山病(肺水腫、脳水腫)が二千〜三千メートルでも起こることが初めて明らかにされ、高山病に関する事柄は診療所四十五年間の体験から得た大きな成果の一つであるという。

「私は山岳部に入り、診療所で緊急医療の実際を学んだ。緊急医療は医療の原点であり、医療に携わる者の使命でもあるとの信念を持ち、いまでも阪神大震災やアフリカへも飛んでいく。最近では医療の細分化によりいわゆる専門馬鹿になってきているが、専門家になる前に厚みのある幅の広い医者でなければいけない。今後とも可能な限り現場に立ち、実際の医療を継続していきたい」と締め括った。参加二十八名。

(狩野芳郎)

自然保護委員会

函南原生林の自然観察会

自然保護委員会恒例の自然観察会を十一月十六日、静岡県函南町の函南原生林で行った。



樹齢700年の巨木もあるという

＊ 函南原生林は、水源涵養のために生立木は絶対に切らないという施業方針が長い間守られてきたこと、またこの禁伐林区域が箱根関所に隣接することから、徳川幕府がこの原生林の開発を差し控えたこと”を主因として、今の姿がそのまま守られてきた。二〇〇ヘクタール余り

函南原生林(二三ヘクタール)は、箱根外輪山の一つである倉掛山(二〇〇四メートル)の南西斜面にある。江戸時代から下流の田方平野の水源涵養のため、関係住民自らの手で「禁伐林」として手厚く保護されてきたところである。現在は、箱根山禁伐林組合の手によって管理されている。

新宿駅を八時四十分、貸し切りバスで出発。車内で伊藤敏委員による森林の勉強会が開かれる。観察に先立ち、森林分布、植生遷移、森林生態系などにつき要領よく解説していただき、大変有意義であった。

現地では、まず森林総合研究所元所長・山口博昭氏より概略の説明を受けた後、森に入る。参加者は四班に分かれ、それぞれに森林総合研究所あるいは森林インストラクターの

講師がつく。森林の見方、樹木の名前など懇切な説明が参加者の方々から好評であった。

学習の道入り口の門をくぐりハコネダケの密生している道を下ると、海拔七〇〇メートルの薄暗い原生林の中で、樹齢百年前後といわれるヒメシヤラの赤い木肌が目に入る。そして樹齢七百年といわれる日本でも有数のアカガシ、ブナの巨樹をはじめとして、ケヤキ、イヌシデなどの高木が林冠をおおう。インストラクターの説明を聞きながらの私のメモには、三十九種ほどの樹木の名前が記録されていたが、この原生林にはシダ植物以上の高等植物百十四科、二百九十三種、五十六変種、十四品種が確認されているという。

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

明日を築き業界をリードする

コンクリート製品の総合メーカー

前田製管株式会社

本社/酒田市上本町6-7

☎ (0234) 23-5111

という森林としては決して広くはないこの森が、ほぼ手つかずの原生林として残されてきたことは、自然保護を考える上で大変多くの教訓を含んでいると思う。

伊藤委員の「森林を生態的に見る。森林が発信している情報を受け止める」という言葉も頭におきながら、新緑のこの森を、もう一度訪ねたいと考えている。

〔参加者〕 森林総合研究所元所長・山口博昭氏 森林総合研究所・千島敏夫氏 森林インストラクター・伊藤敏、横田和男、牧内薫各氏 他五十二名。
(篠崎 仁)

集会委員会

きのこ山行

山形県・摩耶山

十月十九、二十日、山形県摩耶山のきのこ山行に参加した。摩耶山は朝日連峰に連なる最北に位置し、大鳥川側は急峻な山容を見せている。温海町と朝日村に接し、一〇一九・七メートルと標高は低い、日本海に面する三百名山の一つである。このたびの企画は、秋の紅葉、味覚のきのこ、海の幸と、何拍子もそろった期待の山行であった。

十九日夜、バスで新宿発、翌朝早



紅葉・温泉・きのこ鍋に満悦の54名

別ルートで登ってきた青森支部の高橋会員と一緒に、五十五名全員が山頂に立った。晴れていれば高度感満点の眺望が得られるはずが、傘をさしての休憩

く温海温泉経由で登山口まで入る。ここで山形支部の金森、後藤両会員と合流し、総勢五十四名で出発。

林道の終点瀬戸橋登山口で山道に入る。天気は薄日が漏れるまでに回復し、雨に濡れた樹々の彩りも鮮やかだ。道は沢沿いを行くようになり、正面に婦女子の滝が落ちている。二岐の岩壁に赤い鉄梯子がかけられ、そこは中尾根に続く入り口である。登りはじめは息をもつかせずの急登の連続。あいにく上部はガスに包まれ、急峻な山容を垣間見ることができなかったが、上に行くほど傾斜が増す。山頂直下では降り始めた雨に足を取られながら、一步一步よじ登る。

山頂で先行の岳友が迎えてくれる。

で、避難小屋での集合となる。

秋色濃い山の景色を味わいつつ、温泉、きのこ鍋、海の幸、酒へと思いを巡らせながら、土砂降りとなった雨の中を関川へと下った。

(石光久仁子)

自然保護委員会

早池峰の

自然保護を考える

平成八年十一月三十日十四時三十分から約二時間、岩手支部の湯浅俊行会員による講演会を行った。

まず早池峰がなぜ特別天然記念物の地域指定を受けるほどの貴重な山なのか、また、南の薬師岳が、ほと

んど同じところにあるながら全く植生相が違うのかなどの理由について説明があった。さらに一九九九年のインターハイで山岳競技会場として河原坊から早池峰山頂、中岳、鶏頭山の往復コースが計画されていること、小田越からの早池峰南面の登山道の裸地化が急速に進んでおり、中でも貴重な高山植物のエゾノツガザクラがもはや絶滅したらしいこと、トチナイソウも絶滅寸前であることなどが、写真を交えて紹介された。

その後懇談に移り、貴重な高山植物を守るためにはどうしたらよいかを話し合った。その結果、地元の世論を喚起することが何よりも重要であることで意見の一致をみた。昭和五十二年に日本山岳会が要望書を提出して、「早池峰の自然を守るためには小田越を通る車道を廃止するべきである」としたが、この要望が入れられなかったために、現在の事態を招いていることを全員が痛感した次第である。出席者・中村副会長他二十名。
(澤井政信)

三水会現地集会

静岡・竜爪山

三水会は十一月十日、沼津かもしか会代表の加田勝利さんと同行して

いただき、竜爪山(静岡市、一〇五一メートル)で現地集会を催した。駿河湾を望む展望の山だった。

静岡市は、背後に三千メートル級の山々を持つ。県庁所在地で、こんなに高い山のある都市はほかにない。最北端の間ノ岳から稜を分けて延々と南下し、山並みが切れて平野に至る地域に竜爪山はある。眼下に清水、静岡の市街地、三保の松原、そして駿河湾、東に富士、愛鷹、伊豆、西に聖がひととき目立つ。

前夜は、かもしかの小屋に宿泊した。加田さんが自宅の近くに長年かけて建築した小屋であって、沼津市内にあった。海の幸に舌鼓を打っての歓談が遅くまで続いた。

静岡市街の北、茶畑の中の林道をゆくと、竜爪山登山口がある。一時間ばかりで穂積神社に着く。古くから信仰を集め、とくに戦時中は弾避けの神様としてにぎわったそうだ。林立する杉の巨木は樹齢六百年から八百年という。神社までは車も入り、我々も車を利用した。山道はそこから急登になる。

急登とはいえ、東海自然歩道として整備されていて、ロープ、鉄パイプ、仮設梯子に助けられながら薬師岳、いったん鞍部へ下り再び登り返して文珠岳の頂上に出る。ふたつあわせて竜爪山という。文珠岳のほう

が一〇メートル低いが、一等三角点がある。人工林にさえぎられて見通しが悪かったのだが、先般の台風で多くの木が倒れた。削り取られた山肌が痛々しいが、展望はずいぶんよくなった。

神社の頂上は、往復二時間だった。参加者十二人。(高橋重之)

94同期会 第三回懇親山行

鹿島槍ヶ岳

春の乗鞍高原に続いて、秋の懇親山行は一泊二日で鹿島槍ヶ岳を選んで開催した。

十月五日、昼少し前、登山口の扇沢橋の袂に、参加者十五名は思い思いに集まってきた。軽い食事をとりながら、簡単に自己紹介した後、今夜の泊まり場である種池山荘へ向かって一歩を踏み出す。

柏原新道をめぐる山肌は、見事な紅葉である。後刻、小屋主の柏原さんの話では、ここ十年来の紅葉とか「いいな! 素晴らしいね! 綺麗だなあ!」との声がひっきりなしに口々からもれる。そんな幸運を喜びながら歩を進める。

登るにしがたって盛りを過ぎた感じもしないではない紅葉だが、まだまだ十分に鑑賞に堪えられる。小屋

の少し手前で小雨がパラつきですが、雨具を着けるほどのこともなく小屋につく。所要時間三時間二十分、おむね予想通りのタイムである。明日は都合で何人かが鹿島槍まで行けないとのことなので、記念撮影を済ませてから小屋に入る。

ひと休みして歓談しているうちに宴席が設けられ、待望の懇親会が始まる。担ぎあげた地元の銘酒「大雪溪」の栓が抜かれ、小屋からの差し入れの「白馬錦」や「大黒正宗」が加わるころには宴たけなわとなる。

小屋閉めも間近で他のお客も少ないのをよいことに、唄、踊り、珍芸が始まり盛り上がりつつある。

Nさんから、東京から青森まで山路伝いに歩いてみないか、との提案があり、飲んだ勢いもあって前向きに検討することを決議する。

こうして山上の夜は更けていき、満天の星空に明日の好天を信じて各自の部屋に戻る。

翌六日、未暁、小屋を抜け出る。中天に月がかり、その明かりを頼りに爺ヶ岳に向かう。展望の名山ともいえる爺ヶ岳からの眺望は帰りに愉しむことにして先を急ぐ。

冷池山荘で心尽くしの朝食をいただいて山頂を目指す。脇目もふらず登る人、名残の紅葉を楽しみながらゆるゆると進む人、地形や地質の観

察に余念がない人……と、それぞれ思い思いに山頂に立つ。

二八八九メートルの頂点には朝日に輝く立山三山、劔岳を始めとして見えざるものはなしの大展望が待っていて、皆を悦ばせてくれる。その光景をここに紹介するには紙数が足りないのが残念である。

そんな景色を堪能して下山にかかる。長駆して扇沢まで往路を戻り、大町温泉郷で入浴、乾杯し、再会を約して家路につく。

文中、東北縦貫については、会員諸氏、ことに東北在住の方には、いろいろとご協力を賜りたいと、お願いする次第である。(菊川忠雄)

東京・仙台・名古屋・大阪・広島・福岡発着

ネパール・ヒマラヤ特別運行便

3/22発 ヒマラヤ・スーパーフライトと
アンナプルナ展望9日間(他全8コース)

〈スーパーフライトはヒマラヤを東から西へ飛びます〉

特別企画 エベレスト→ロールワリン→ジュガル→ランタン→
ガネッシュ→マナスル→アンナプルナ→ダウラギリ→ポカラ



運輸大臣登録旅行業490号/日本旅行業協会正会員/ATA公認代理店

ネパール・ヒマラヤ・サービス株式会社

本社/〒105 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階 TEL.03-3503-1911

大阪 ☎06-444-3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

仙台 ☎022(265)4611 広島 ☎082(542)1660 札幌 ☎011(711)7106

●詳細ツアー・パンフレットをご請求ください。(※りんゆう観光)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

越後支部

創立五十周年 記念行事多彩に展開

一、高頭祭

七月二十五日、弥彦山太平園地で高頭祭を開催した。昭和二十五年、弥彦山に高頭仁兵衛翁の寿像を建設して以来、毎年高頭祭を行ってきた。武田久吉先生による寿像碑銘文板が著しく損傷しているので、創立五十周年記念事業の一つとして支部会員から浄財を募り、完全修復。村木潤次郎会長をお招きしての第三十九回高頭祭と併せ、竣工式を挙行了した。

二、記念山行

九月二十八日、大湯温泉村上屋旅館大広間で歓迎会、懇親会を行った。二十九日、越後駒ヶ岳コースは参

加者五十四名、リーダー・藤井信。銀の道コースは参加者十六名、リーダー・五十嵐篤雄。

絶好の登山日和に恵まれ、和気あいあいの楽しい山旅であった。

三、山岳写真展

十一月十九日～二十三日、東北電力新潟営業所グリーンプラザで越後支部、新山協共催で写真展を行った。出品者二十八名、作品六十三点。初めての試みであったが、格調高い力作がそろい、大好評であった。

四、記念祝賀会

十一月二十三日、会員九十七名の参加を得て、新潟東映ホテルで創立



盛大に支部創立50周年を祝う

五十周年記念祝賀会を開催した。三日文化の日に平田大六支部委員が藍綬褒章を受賞、その祝賀会も併せて行った。

来賓にJAC常任評議員・重廣恒夫会員、新山協会長・鈴木敏雄氏を迎え、祝辞を頂戴する。続いて越後支部永年在籍者の表彰を行う。五十年以上五名、四十年以上二十三名、三十年以上五十九名であった。

記念講演は重廣会員が「マカルー東稜登頂」をスライドを交えて行い、深い感銘を与えた。

記念晩餐会は室賀輝男副支部長の挨拶で始まり、冒頭で平田会員の幼友達の小林智明副支部長の藍綬褒章受賞を称える言葉があり、続いて謝辞が述べられた。

望月力支部名誉会員の首頭で乾杯、懇親会が始まる。新入会員紹介、記念撮影、そして二時間の宴会は銘酒の差し入れもあり大盛況であった。

(五十嵐篤雄)

山形支部

後立山連峰唐松・乗鞍岳

十月十日(快晴)

山形を八時半、五人が一台に乗車して出発。小国経由で新潟に入る。これより北陸高速道に乗る。海を眺めながらの米山S・Aにて昼食。糸

魚川で高速道を降り、国道一四七号線に入る。糸魚川から松本に至る道は、かつて我々が長野の山々へ幾度となく通った道であり、各自それぞれに思いのある山への懐かしい道でもある。

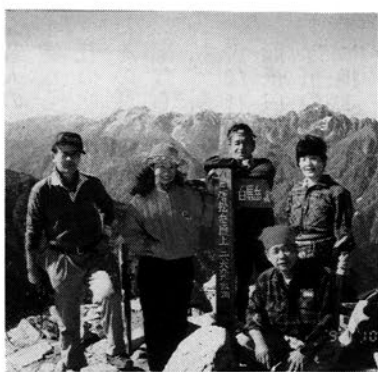
白馬到着十六時少し前。最終ケーブルによるやく間に合いホッとする。リフトを乗り継ぎ、八方池山荘着は十七時前。夕刻、五竜岳、鹿島槍ヶ岳の岩峰が荒々しく迫り、ようやく山へ入ったという実感がする。遙かに遠く下界の灯が点々と連なり、空には無数の星々がきらめき、明日の好天を約束してくれる。

十一月十一日(晴)

八方池山荘出発五時、外は薄暗く肌寒い。下界に点る灯や星々、夜明け前の眠りの中をリーダーを先頭に出発する。

高度を次第に上げ一息ついた頃、果てしなく広がる雲海の上に金色の光輝く神々しい日の出を迎え、一同感動する。後立山連峰の峻厳な山々が鋭峰を次々に現わし、我々を歓迎してくる。扇の雪渓八時前、丸山八時半通過。唐松岳山頂に九時三十分到着。全て順調、予定通りである。

十月の抜けるように蒼く澄んだ唐松岳山頂で、立山連峰の三六〇度の素晴らしい展望を心ゆくまで満喫したあと、折り返し八方池山荘を経て



唐松岳山頂ですばらしい展望を満喫

白馬ケーブル駅で下山、今日の宿泊地である梅池山荘へと向かう。

梅池リフト、ゴンドラは全山紅葉の中を進み、一段と心を和ませてくれる。夜半に降雨があり、明日の乗鞍岳山行が若干心配ではあるが、体調のほうは全員良好である。

十月十二日(晴のち小雨)

昨夜来の雨も朝方に止み、濃いガスも次第に薄れ、天候に回復の兆しが見えてくる。梅池山荘出発六時。

昨日と同様、連なる山々が雲海の中に青く浮かび上がる。天狗原から岩だらけの沢を直登し、一気に乗鞍岳山頂に九時三十分到着。山行計画はここまでであったが、天候は快晴、時間にも余裕があったため、白馬大池まで足を延ばす。

白馬大池山荘は明日で小屋じまい。後片付けの真っ最中で大忙しであった。青空に映え、池はキラキラと美

しく輝いてはいるが、山の冬はすぐそこまできているのである。

山荘で小休止ののち下山開始。梅池山荘経由、燃えるような紅葉をケーブルから探勝。小谷温泉へ。途中、小谷村歴史資料館を見学、信州信濃の新蕎麦で腹を満たし、小雨に煙る温泉に十六時半着。ゆっくり温泉につかり、三日間の山の疲れをとる。明日は天候がよければ雨飾山山行の予定であるが、夕刻より激しい降雨が続き山行が危ぶまれる。

十月十三日(雨のち晴)

昨夜からの激しい雨は今朝になり小雨に変わったものの、雨雲の動きは激しく、好天への期待は薄い。雨飾山は後日の楽しみにとっておくこととし、八時半に小谷温泉を後にし、三泊四日の心に残る唐松岳、乗鞍岳の山旅を無事終えた。(今野秀穂)

宮城支部

焼石連峰・牛形山

九月八日、朝のひんやりした空気の中、ブナの森を縫って登り始めた。前夜は激しい雨の上がった夏油温泉テント場で、満天の星空に見守られて一行十一名が一夜を明かしたのだ。広大な山林には、幾代もの落葉がズシリと敷きつめられ、ブナを養っている。杖代わりのストックの先に

腐葉が重なりあって着いてくる。

上下四十歳の年齢差の一行のうち、七十歳を越している吉中夫妻も元気な歩を進める。やがて、夏のような青空と白い雲が滴る汗を呼ぶ。夏油川の谷を隔てて、昨日の雨をたっぷり吸った経塚山の緑が艶やかに光っている。この山も牛形山に劣らず量感豊かに居座り、どっしりと腕を組んだ力士さながらだ。

草つきガレに八時四十分。トリカブトとアザミの濃い紫の群落が、ガレ場を彩り、目を奪われてしまう。

頂稜からカール状に挟られている谷間の湿原をよぎり、雨が降れば一筋の川と化してしまいうる急な一本道を登って、やっと乾いた尾根に出た。見渡す焼石連峰の山塊は、広く豊かに鎮まっている。その中でも我が牛形山は、牛の背骨を思わせるような頂稜に、巨牛が二頭対峙して今にもぶつかり合おうとしている姿を思わせ、ここを目指す者へ何か滾るものを与えて止まない。

みちのくの深山・牛形山頂九時二十五分、ここで、早池峰、薬師や三界、真屋の連山に遥かに挨拶を交わした。雲の流れる東北の奥深い山巔で、神奈川や岩手の人たちも、我々の輪に入り、来年の千支の山に一定早く登った感慨を分け合った。

(大橋克也)

船形連峰・後白髪山

十月二十七日、昨日から今朝にかけて荒れた天候が、紅葉の終り頃の山を白く染めた。雪で笹が倒れかかって径にかぶさっているのを、杖で払いながら歩く。このあたり、広々とした台地状の尾根で、スクスクと伸びているブナの二次林に混じって、二〇メートルもあろうかというイタヤカエデが何本も真っ直ぐに立っている。水気を含んだ雪が、ひとしきり樹の葉に、パーティーに降りかかる。晩秋に近い山を新雪を踏んで登る快さ。

味の技、心でつくる



味さし坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

味さし坊 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有楽町1-5-2 ☎03-3504-1905
味さし坊 麹町店
(有楽町線麹町駅東口)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
味さし坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友膳ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

(昔人の詠みたる)

雪ならばいくら酒手をねだられん
花の吹雪の滋賀の山越え
(その反歌として)

雨ならば濡れねずみならん熊笹の
払う新雪身にふりかかる

雪なれや酒手はずむも惜しくなし
熊笹白き船形への道

寒気のせいとか、パーティーは休まずに歩き続けた。雪に隠れた木の根に滑ることさえ快いリズム。峰頭部の広い雪原に出て、さらにしばらく進む。

後白髪山頂、積雪五センチ。西風強く、顔を向けられないほど。周囲は霧水の白銀に包まれている。船形本峰、荒神山、仙台カゴが雲の切れ目に指呼できる。北方眼前に、三峰山も白く立派に袖を連ねている。誰かがビールで乾杯しようというが、この寒風の中のビールはごめんだ。

下山路は雪も融け始め、差し込んだ陽が、灌木にビッシリとついていた霧水を音を立てて溶け散らせていく。登山口に戻り、雪の下から採ったばかりのムキタケを入れた芋煮を味わい、定義如来で解散。(高橋 功)

宮崎支部

晩秋の祖母山を満喫

■第十二回宮崎ウエストン祭



ウエストン碑の前で五ヶ所小学校児童と記念撮影

紅葉の季節に入ると、九州島最高峰の祖母山(二七五六・七メートル)に向かって鎮座するW・ウエストン師のレプリカのある県北高千穂町五ヶ所高原の三秀台に思いをはせる。

宮崎ウエストン祭は錦繡の十一月三日、地元高千穂町、JAC宮崎支部の主催、高千穂町観光協会、田原地区村おこし推進協議会、高千穂山の会の後援で開催された。今年で十二回の歴史を刻む式典は、五ヶ所小学校児童による点鐘に始まる。ウエストン師を偲び、山岳遭難者を悼み、登山者の安全を祈る黙禱を捧げた後、献花、町長の歓迎の挨拶と続いた。

JAC宮崎支部長は、ウエストン師祖母登山百周年と高千穂町七十年の第六回宮崎ウエストン祭の思い出や、ウエストン師が南アルプス鳳凰三山・地蔵岳の岩峰登山のエピソードを語り、二十一世紀に羽ばたく少年たちにチャレンジ精神を訴えた。また、支部員(自然保護委員)による「祖母山とその周辺に生息する野鳥」のミニ講話、エーデルワイスの歌合唱で式典を終えた。

ウエストン師が明治二十三年十一月六日にたどったコースを、先発者を含めた二百五十人に続き、会員十八人は最後尾から登山を開始した。

当日の行程は、北谷登山口発十一時十五分、国観峠十三時二十分、昼食三十分、祖母山頂十四時五分、休憩四十分、風穴十五時四十分、北谷登山口着十六時三十分。好天に恵まれた登山となった。

■クマ(親父)が棲息した静寂な山

JAC宮崎支部では、十一月の定例山行を二日、三日とし「ウエストン祭前日登山」を計画。宮崎を二日七時に出発。二台の四駆に十人が分乗して国道一〇、二一八号を北上、四時間の走行で高千穂町上野の親父山(一六四四メートル)の登山口に到着。十一時登山開始。

親父山は、祖母傾連山の障子岳から西に伸びる尾根筋に位置する地味

な山である。地質は、第三紀中新生に噴出した祖母火山岩で、安山岩、石英安山岩質の溶岩からなっている。山名は、かつて熊が棲息していたことからの由来。

登山口は紅葉に染まり、谷川を渡るとモミ、トガ、ブナ、ミズナラ、カエデ類などの混交樹林帯に入り一挙に急登となる。全員が心肺機能を高めながら高度を上げる。大汗をかきながら三十分で稜線にたどり着く。そこは、シャクナゲの灌木が林立し、蕾をいっぱいにつけて、来る春を待つ風景に出合う。一時間二十分で山頂着。缶ビールで乾杯。

山頂一带は、祖母傾国定公園特別地域に指定され、また山麓一带は祖母傾県立公園に指定されている深山である。親父山から黒岳(一五七八メートル)を経由して三尖(みつとぎり)の縦走コースをとる。約二・五メートルのスズタケのブッシュが始まる。ブナの大木が林立して落葉後の裸枝を空に突き出し、尾根筋を流れる霧雨と濡れた黒ずんだ木肌とのコントラストは幻想的でさえある。突然、空間が現れるとそこに黒岳の巨岩が立ちはだかる。周辺にはイワカガミが群生し、山頂に立つと霧が晴れて展望が開け、雨後のブッシュの苦勞は吹き飛ぶ。再びブッシュの連続で三尖の山頂。ここから国有

林の林班界の伐採されたコースをたどり、親父山から三時間十五分を消費して、錦繡輝く登山口に十六時十五分着。

十八時から、五ヶ所高原の農産物集荷場で開催のウエストン前夜祭に参加。田原地区あげての熱っぽい歓迎を受けた。神事に引き続き、小中学生などによる伝承の高千穂神楽が奉納される。特大のキャンプファイヤーの炎に照らされて、カッポ酒を酌み交わす。二十一時から五ヶ所公民館に場所を移して東京、福岡、熊本、大分のJAC会員との交流会に晩秋の夜を楽しんだ。(井野元 繁)

岐阜支部

第二十三回山岳講演会と 貝月山懇親登山

十一月二十二日、岐阜メモリアルセンターにおいて、常任評議員神崎忠男会員を講師に招いて「第一・第三の極地」をテーマに講演会を開催した。

会場へは、会員、会友及び一般の方々も交えて、百余名の聴講者があり、盛会であった。

七十年、八十年、八十八年と過去三回にわたり、日本山岳会からエベレストへ登山隊員として参加した話や九十五年には日本大学エベレスト

登山隊長として、見事世界で初めて北東稜ルートから制覇した話、そして、南極、北極での探検の様子など、スライドを用いて約一時間三十分にとわたり話していただいた。

翌二十三日は「森に学び、森と暮らす村」として知られている岐阜県春日村の長者の里から、貝月山(一二三四メートル)へ神崎講師と会員二十六名が参加し、懇親登山を行った。参加者からは「こうして本部会員の方と気さくに語り合いながら登山が楽しめたことは、講演会と同様に意義があった」と、喜びの声が上がっていた。(清水芳彦)



図書室受入報告 (1996年11月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
西尾寿一	層峰春秋 (発行所: 京都山の会出版局)	217pp/19cm	ナカニシヤ出版	1996	出版社寄贈
横山宏	横山宏のネイチャーフォト講座: 撮影の基礎・作画の技術・他	111pp/26cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
浅田英夫	星空フィールド日記(MY DATA図鑑)	239pp/19cm	山と溪谷社	1996	出版社寄贈
沢野ひとし	てっぺんで月を見る: 山の劇場	259pp/20cm	山と溪谷社	1989	著者寄贈
久保孝一郎	山と人と	158pp/21cm	久保孝一郎(私家版)	1995	関塚貞亨氏寄贈
薬師義美・雁部貞夫(編)	ヒマラヤ名峰事典	648pp/27cm	平凡社	1996	出版社寄贈
工藤隆雄	富士を見る山歩き(Shotor Travel)	159pp/22cm	小学館	1996	出版社寄贈
芦生の自然を守り生かす会	関西の秘境・芦生の森から	126pp/22cm	かもがわ出版	1996	編者寄贈
山学同志会(編)	ザイルを結ぶ男たち: 山学同志会40周年記念誌	307pp/21cm	山学同志会	1996	発行者寄贈
小谷部全一郎	ジャパニーズ・ロビンソン・クルーソー	249pp/20cm	皆美社	1991	洲崎幸久氏寄贈
Jenichiro Oyabe	A Japanese Robinson Crusoe (復刻版)	219pp/19cm	一寸社	1991	洲崎幸久氏寄贈
James Ballard	One and Two Halves to K2 : The Journey of Alison Hargreaves' Family to K2	208pp/25cm	BBC Books	1996	購入
Lorna Siggins	Everest Calling: Ascent of the Dark Side	191pp/26cm	Mainstream Pub.	1994	購入
Greg Child (ed.)	Climbing: The Complete Reference	264pp/29cm	Facts on File	1995	購入
Gary Arce	Defying Gravity: High Adventure on Yosemite's Walls	194pp/28cm	Wilderness Press	1996	購入
David M. Sharman	Climbs of the Cordillera Blanca of Peru	124pp/21cm	Whizzo Climbs	1995	購入
J. McEachern et al.	Prospects for Tourism in Manaslu: A Reconnaissance Survey	121pp/24cm	IUCN Nepal	1995	吉永英明氏寄贈
Toni Hagen, P. Pierce (tr.)	Building Bridges to the Third World : Memories of Nepal 1950-1992	386pp/25cm	Book Faith India	1994	吉永英明氏寄贈

INFORMATION



◆医療講演会

医療委員会

冬山登山される方に、覚えていた

だきたい凍傷の治療についてです。

日時 二月六日(休) 十八時三十分～

場所 日本山岳会ルーム

講師 長尾梯夫会員

演題 「凍傷治療のあれこれ」

◆第二十五回山岳史懇談会

図書委員会

日時 二月二十一日(金) 十八時三十分～

場所 日本山岳会ルーム

講師 井上 晃(富山在住) 会員

演題 「立山・剣岳」

◆第六十九回山の自然学講座

自然保護委員会

日時 二月十五日(土) 十三時～十七時

場所 カンダパンセ(JR水道橋駅

西口下車 正面の道を南に三

〇〇メートル、三崎町二丁目

の信号を右折してすぐ左)

演題と講師

「高山蝶の面白さと蝶から見た高山」講師・池田明彦

「ネパールでの石楠花調査と植林の報告」講師・大森弘一郎

参加費 二千元(学生五百円)

申込 当日で可

問合せ・自然保護委員会・熊野将

TEL・〇三―三八二〇―〇二五七

◆冬山登山研修会

指導委員会

いずれもプロの山岳ガイドが講師

を担当する質の高い研修会です。冬

山の本格的な登山技術、山岳スキー

を学ぶ絶好のチャンスです。ただし、

懇親を目的とした団体ツアー登山で

はないことをくれぐれもご理解の上、

ご参加ください。

●詳細案内の希望者は氏名、会員番

号、住所、電話番号を明記の上ハガ

キまたはFAXで日本山岳会指導委員会

宛にお申し込みください。

①アイスクライミング研修会

会報十二月号に案内を掲載。

②冬山登山研修会

対象 積雪期登山初級者・中級者

内容 総合的な冬山登山技術の研修。

山岳スキーは行いません。

日時 二月二十二日(土)～二十三日(日)

山城 中央アルプス・木曾駒ヶ岳

宿泊 山小屋泊

参加費 一万五千元(予定)

対象 スキー登山初級者・中級者

内容 実戦的かつ総合的なスキー登

山技術の研修

日時 三月二十一日(金)～二十三日(日)

山城 中央アルプス・御嶽

宿泊 旅館泊

参加費 三万円(予定)

④中・上級者対象山岳スキー研修会

対象 スキー登山中級者・上級者

内容 更なる向上を目指しての実戦

的かつ総合的なスキー登山技

術の研修

日時 四月十二日(土)～十四日(月)

山城 谷川岳周辺(万太郎谷・茂倉

沢・芝倉沢など)

宿泊 山小屋及び旅館

参加費 三万円(予定)

*申込書は詳細案内に添付。

*参加者は遭難救助費用がまかなわ

れる傷害保険・共済などに各自で

必ず加入しておくこと。

*問合せ 熊崎和宏(指導委員会担

当理事) TEL・〇四二二―三七一四

六八二

◆山岳映画ライブトーク

―山岳映画もよま話―

フィルムビデオ委員会

山の映画は記録であり、作品であ

り、また時代を証明する貴重な資料

です。プロとして活躍し制作に関わ

ってきた三人の委員に、山岳映画撮

影のよもやま話を聞く会を催します。

また山の映画を観ながら、これから山でビデオを撮る人たちに、プロの撮影技術のノウハウも披露します。

日時 三月四日(火) 十九時～

場所 日本山岳会ルーム

上映作品 「交響詩・立山」ビデオ版

講師 羽田栄治 森宏子 近藤隆治

会費 五百円(茶菓代)

◆第五回山好きの山の絵展

アルパインスケッチクラブ

日時 二月二十三日(日)～三月一日(土)

十一～十九時(初日は十三時

より、最終日は十七時まで)

場所 交通会館二階画廊(JR有楽

町駅前) TEL・〇三―三二一五

一七九六二



ヨーロッパアルプスでの新鮮な遊び、それは地元に残しいプロの山岳ガイドとの山行だ！ 有名な歴史ある山々に登り、溪谷を滑り、ヨーロッパの登山文化の全てをお見せしよう。貴方の能力と要求に応じた山スキーもアレンジできる。ご連絡を待つ。こちらスキーインストラク

ターも業務。料金は一日当り sFr.350. より。言葉は英・仏・独。
ベアート・フートマッハー(Beat Hutmacher) Chalet
Enzian, CH-3707 Därfligen / Interlaken.
Tel & Fax: 001-41-33 823 20 71

会務報告

十一月理事会

日時 十一月十四日(木) 十八時三十分

五分二十時

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 村木会長、中村、宮下各副会長、大屋、中川、大谷、松浦、伊藤、水野、南井、堀井、渡邊、溝口、山本、熊崎各理事、川崎、石橋各監事、小倉、大倉、村井、大森各常任評議員

〔委任〕 斎藤副会長(京都大学日中友好梅里雪山峰合同学術登山隊一九九六総隊長行動中)、吉永、田邊、大藏各理事、神崎、重廣各常任評議員

【審議事項】

(一) 写真借用願の件

大屋

W・ウェストン夫妻、上条嘉門次、松本清蔵一行の写真一点「サライニ三号 ブックレビュー」掲載のため、小学館サライ編集部より借用願が出された。

承認

(二) 写真転載許可願の件

大屋

広報誌「仙台市政だより」十二月一日号に仙台市に関わりのある人物紹介シリーズで、横有恒氏を取り上げる。参考資料として「山岳」第八

四年掲載写真の転載許可願が仙台市総務局・平井広報課長より出された(執筆者は日本山岳会宮城支部長・柴崎徹氏)。

承認

(三) 資料撮影許可願の件

大屋

雑誌「グッティ」に、本会所蔵資料(マナスル写真集Ⅱ毎日新聞社刊、山と溪谷の一部など。誌上発表に際しては別途発行元より掲載許可を受けるのと但し書き付)の撮影許可願が(株)ベネッセコーポレーション・グッティ駒崎編集長より出された。承認

大屋

(四) 論文転載願の件

大屋

日山協本年度事業「日体協公認コース」養成のため、専門科目用に「一九九六年度競技力向上指導者専門科目教本」作成にあたり、本会の論文『中央アルプスと山岳雪崩』(山岳)六二一号掲載、『屋久島の世界自然遺産登録と環境保全』(山岳)第九〇年掲載の二論文転載許可願が、日山協会長名で出された。

(各論文執筆者に通知の上)承認

承認

(五) 委員会委員追加承認の件

南井

百年史編集委員会委員に南川金一会員を委嘱する。

承認

(六) ルーム・事務局の年末年始休みの件

大屋

十二月二十九日(日)～一月五日(日)とする。

承認

【報告事項】

●一九九六年度年次晩餐会

大屋

・計上予算約千百万円だが、マナスル四十周年記念行事を含むので、会場費など財務担当と検討の上で一般会計からの支出を見込む。

・招待者は、当時の登山隊関係者と毎日新聞社関係など。

・マナスル四十周年記念行事参加一般客は、新聞紙上広報の上ハガキで申込とする。

・支部長会議は、会長、副会長、常務理事、常任評議員、K2登山隊より代表一名の出席で対応する。

●山岳団体傷害保険の現況

中川

・現在、加入者は四百六十余名であり、努力して第一目標の五百名を目指す。各位、よろしくお願いしたい。

【委員会報告】

●総務委員会・中川

・十月二十六日のルームにおけるオリエンテーションに新入会員二十六名参加。

・十二月七日

①支部長会議 高輪プリンスホテル 紅玉の間 十時三十分

②マナスル四十周年記念講演会・展示会 地下一階プリンスルーム 十三時

③年次晩餐会 十六時受付開始

④海外登山報告 十六時三十分 慶雲の間

雲の間

⑤委員会・同好会作品展 十六時 慶雲の間

「山岳」第九十年「女性懇談会をふり返って」の記事について一部訂正

昨年度発行の「山岳」の標題の記事中、事実と異なる点がありましたので、本欄をお借りし訂正させていただきます。

「女性懇談会と日印合同登山」の項の中で、伏見紀子さんが「印パ戦争が終わって、またインドから合同登山をしませんかと言ってきた。そのころ宮崎英子(現・久野)さんが自分たちの会でインドを目指していたけれど、許可がもらえないで山岳会に入ってきたんです。(以下省略)」とお話になっています。

しかし、私たちは登山申請をしたことはありませんし、これが私の日本山岳会入会の動機でもありませんので、伏見さんのご了解を得て、この部分を削除させていただきます。

(久野英子)

●図書委員会・南井

①第二十八回山岳図書を語る夕べ 十一月二十一日(木)十八時三十分 集会室

テーマ「月刊誌『アルプ』三百号の軌跡」

講師・三宅修氏

②第二十五回山岳史懇談会

一九九七年二月二十一日(金)十八時三十分 集会室

テーマ「立山、剣岳」

講師・井上晃会員(富山在住)

●集会委員会・中川

①きのこ山行 十月十九日(土)二十

日(日)約六十名参加 山形県摩耶山

②きのこ山行写真交換会 十一月十

五日(金)十九時 集会室

③年次晩餐会後の懇親山行 十二月

八日(日) 奥多摩日の出山

④八方尾根スキー懇親会 一九九七

年一月十日(金)十二日(日) 国民宿舎

宿泊

●医療委員会・堀井

①十月二十三日 東京「ホテル八

重洲龍名館」において医療委員会を

開催。併せて「日中友好梅里雪山峰

合同学術登山隊一九九六」に出発予

定の斎藤惇生隊長および松林公蔵総

括隊長の壮行会を行った。

②九月二十四・二十七日、ペルーの

クスコで開催された「第二回世界高

所医学・生理学会議」(中島、増山、

堀井の各委員が出席)について増山

委員より報告。なお、次回(一九九

八年五月)は日本の松本市で開催予

定であり、日本山岳会も後援。

③医療委員会主催講演会 一九九七

年二月六日(木)十八時三十分 集会室

テーマ「凍傷治療のあれこれ」

講師・長尾悌夫会員

●図書管理委員会・水野

・図書頒布目録を「山」十二月号に

掲載するが、山研にも備品として書

架を置くことを考慮している。

●指導委員会・熊崎

全国大学山岳部監督会議を十一月

三十日(土)、神戸学生青年センターで

開催。全国三百大学、開催地の選定

が難しく、若人対策としての委員会

行事としては限りがある。今後は本

会行事への格上げを検討してほしい。

●海外委員会・村井

長野県山岳協会の招待で十一月二

十三・三十日、中国登山協会訪日団

が来日。十一月二十九日十九時より

新宿中村屋において、登山でお世話

になった人々で歓迎夕食会を開催す

る。今回の招集方法には問題があり、

今後は検討してルール化したい。

ルーム日誌

11月

1日 フォトビデオクラブ

5日 総務委員会 アルパインスケ

ッチクラブ

6日 青年部 山の自然学研究会

11日 アルパインスキークラブ

12日 自然保護委員会 二火会 ア

ルパインスケッチクラブ

13日 常務理事会 山岳編集委員会

ジャック93会 95同期会

14日 理事会 集会委員会 学生部

18日 総務委員会 資料委員会

19日 百年史委員会 フィルムビデ

オ委員会

20日 三水会 アルパインスキーク

ラブ

21日 図書委員会 学生部

25日 総務委員会 指導委員会

26日 自然保護委員会 科学委員会

27日 集会委員会 山げらの会

30日 自然保護委員会

11月来室者534名

●会員異動

物故

山本 元(二五五三) 8・6・28

加藤 榮(五六九五) 8・7・14

横森見伊(一一二二) 8・9・4

広沢毅一(九六五六) 8・10・3

加藤英生(七二六〇) 8・10・19

大久保五郎(九三〇二) 8・10・29

小田和友蔵(三三六二) 8・11・15

山田和雄(四〇一八) 8・11・22

退会

青田 浩(一一一六〇) 8・11・30

退会取り消し

池戸誠二郎(七五六〇)

■訂正 十二月号(六一九号)一八

◆編集後記◆

会報「山」一月号をお届けし、遅

ればせながら新年のご挨拶を申し上

げます。会報は会員の皆さま方のご

協力によりまして、とどこおりなく

発行してまいりましたが、今年もよ

ろしくお願い申し上げます。

一月号は例年どおり「年次晩餐会」

の記事がトップを飾りましたが、出

席されない会員の皆さま方に会場の

雰囲気をお伝えしようと、写真をで

きるだけ多く載せました。

なお、「報告」と「支部だより」

の原稿が多く、これを優先しました

ので「東西南北」「図書紹介」は次

号に回しました。ご了承をお願いい

たします。(会報編集委員会一同)

日本山岳会会報 山 620号

1997年(平成9年)1月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 村木潤次郎

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 双陽社